

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2021 年度
氏名	沼沢 海優	指導教員 (主査)	齋藤梓 専任講師

論文題目	同性愛に関する社会的伝染の懸念尺度日本語版の検討 —同性愛者いじめ場面における第三者の行動との関係—
------	---

本文概要

【問題と目的】 日高 (2017) の調査によると、日本では、性的マイノリティ当事者の 6 割が学校でのいじめを経験しており、いのちリスペクト。ホワイトトリボン・キャンペーン (2014) は、いじめや暴力が、性的マイノリティ当事者の身体・精神に深刻な影響を及ぼすことを明らかにした。いじめ抑制には第三者への働きかけが重要だと指摘されているが、日本での同性愛者が対象のいじめに関する調査は、実態を調査したものが多く、いじめの構造や要因に言及しているものはあまり見かけない。アメリカで行われた同性愛者が対象のいじめにおける第三者研究では、Antonio, Guerra & Moleiro (2020) が、「自分が同性愛者であると誤って認識される恐れ」のことを指す、「同性愛に関する社会的伝染の懸念」という概念から検討を行った。その結果、同性愛に関する社会的伝染の懸念が高ければ、第三者の介入は抑制され、低ければ促進されることがわかった。本研究では、日本における同性愛に関する社会的伝染の懸念尺度の有用性を検討し、同性愛者いじめ場面において、加害行動を行う第三者は、同性愛者に関する社会的伝染の懸念が高いと仮説を立て検証を行う。

【方法】 大学生 205 名 (男性 84, 女性 120, 回答しない 1, その他 4, 平均年齢=20.15, $SD=1.24$) を対象に実施した。調査内容は①フェイスシート (年齢, 性別) ②社会的伝染の懸念尺度 (Buck, Plant, Ratcliff, Zielaskowski & Boerner, 2013) を、バックトランスレーションをして日本語版尺度を作成し、使用。③公的自己意識尺度 (葛西・松本, 2010)。④属性のないいじめ場面及び同性愛者いじめ場面でのいじめ関連行動 (蔵永・片山・樋口・深田, 2008)。⑤LG 態度尺度 (葛西・田中, 2020)。

【結果と考察】 本研究の同性愛に関する社会的伝染の懸念尺度は、2 因子構造が確認され、第 1 因子は「関係性/関係場面での懸念」($\alpha = .85$)、第 2 因子は「非関係性場面での懸念」($\alpha = .58$) と名付けた。また、葛西・田中 (2020) の LG 態度尺度と、有意な低程度から中程度の正の相関がみられた ($r = .206 \sim .570, p < .001$) ため、妥当な尺度であると判断し、この同性愛に関する社会的伝染の懸念尺度日本語版をその後の分析で使用した。いじめ場面において第三者がとるいじめ関連行動「加害行動」、「傍観行動」、「被害者援助行動」それぞれについて、同性愛者いじめ場面でよりネガティブな行動をとる群、場面で行動が変わらない群、属性のないいじめ場面でよりネガティブな行動をとる群の 3 群に分け、独立変数とし、同性愛に関する社会的伝染の懸念を従属変数として多重比較を行った。その結果、加害行動において、同性愛者がいじめられている場面でよりネガティブな行動をとる群が、そうでない群よりも有意に「関係性/関係場面での懸念」が高かった ($F(202) = 14.153, p < .001$)。

Buck et al. (2013) の同性愛に関する社会的伝染の懸念尺度の日本における有用性について検討した結果、内的整合性、および類似尺度との一定程度の妥当性が認められた。因子別に項目内容を見ると、日本では同性愛者と実際に関わりを持つ場面であることが、同性愛者であると誤認されることへの不安とかかわっていた。このことは、海外に比べ、日本ではまだまだ同性愛に対する受容の態度が低いことが一つの要因と考えられる (OECD, 2019)。さらに本研究では、第三者が同性愛者いじめ場面において、加害行動をする人は同性愛に関する社会的伝染の懸念が高い傾向があることが示された。これらのことから、同性愛に関する社会的伝染の懸念は、日本でも十分に検討する必要がある概念であると考えられる。